

2011



平成 23年 2月 発行

No. 83

日本山岳会秋田支部

秋田市千秋久保田町  
2番 23号 佐々木方

TEL・FAX 018(833)2525

発行者 佐々木 民 秀

編集者 鈴 木 裕 子

### 岡田光行氏追悼号

顧問・岡田光行さん追悼号

佐々木 民 秀

秋田支部第三代支部長として、長い間支部の発展に尽力されてきた当支部顧問・岡田光行さんは、数年前から体調を崩し、入院や通院を繰り返していったが、平成二十一年四月九日早朝、肺炎のため、入院先の病院で家族に見守られ、黄泉の地へと旅立ってしまった。(享年八十四才)



思い起こせば、昭和五十七年の夏ごろ、支部活動が極端に衰退していた最中、既に故人となった福田文二さん(初代副支部長)と佐藤兼治さん(第四代支部長)と共に、支部の再起を誓って支部長職を懇願し、快く引き受けて頂いてから、平成十年までの十七年間に渡っての長い間、支部の再興とその発展に尽力され、今日の支部定礎を築いて頂きました。その功績は大きく、支部員一同感謝の念に耐えないところであります。

岡田さんは、昭和二十年代後半あたりから、所属のアキタ・アルパイン・クラブや県岳連の重鎮として、県体等の役員を長きに渡って勤め、県山岳界の発展にも貢献されて参りました。そして、数々の山行においても常に楽しさを醸し出す行動力をもって、我々後輩を指導してくださいました。

岡田さんとの初対面は、昭和四十年のアキタ・アルパイン・クラブ冬山合宿の打ち合わせ場所として、秋田駅前にあつた勤務先の事務所を借りた時であつたと思います。以後、公私共に渡り、兄貴分として色々と指導等を頂き、共に支部の活性化に長年取り組み、一時期「秋田支部ここにあり」と云われるまでに二人三脚とせても頂きました。

#### 岡田光行氏の主な山歴

- 大正十五年三月 秋田市浜田生
- 昭和二十九年七月 駒ヶ岳・乳頭山・犬倉山・八幡平縦走
- 昭和三十二年六月 鳥海山
- 昭和三十四年十一月 県岳連理事
- 昭和三十五年一月 A.A.C.副会長
- 昭和四十年九月 日本山岳会入会
- 昭和四十二年九月 日山協第一種指導員
- 昭和五十七年八月 第三代秋田支部長
- 平成四年十月 姉妹山締結一周年記念
- 平成六年七月 日本山岳会終身会員
- 平成十一年四月 秋田支部顧問
- 平成十三年五月 日本山岳会評議員
- 平成二十一年四月九日 逝去

月には記念すべき式典を鶴の湯温泉に於いて開催されましたが、それを目の前にして逝ってしまった事は、返す返すも残念でなりません。支部長退任後も、本会の評議員に推挙され、また支部の顧問として我々を指導していただきました。

最後に、貴方に山登りの素晴らしさを教えた初代支部長の荒巻先生を始め、先に逝つた懐かしい山仲間と共に、彼の地から、登山界の安全をご加護して下さいます様お願い致します、心から敬意と感謝を申し上げます。

日本山岳会をこよなく愛した岡田光行さんご冥福を心からお祈りします。

合掌

# 岡田二元支部長を偲ぶ

鈴木要三



岡田さんとは、平成二年の本会年次晩餐会終了後の記念山行以降、支部山行と共に機会あるごとに、かなりの山

にご一緒させていただいた。色々な思い出があるが、私は記録を取るのが苦手なため、集団による登山行動の記録はほとんどないのが実情。少ない写真

を頼りに思い起こしてみたい。  
一番最初は、平成二年十月二日、私がこの会に入会して初めて出席した年次晩餐会の「幕山(神奈川県湯河原町)への記念山行である。参加した全メンバーの名前は記憶に無いが、写真には今は故人となった今野實さんや佐藤兼治さんも一緒だった。



幕山を楽しむ岡田さん  
(後列右)

風は強かったが、陽光が降り注ぐ初めての首都圏山行に満足した一日だった。

次に思い出したのが岡田山への支部山行である。平成八年の支部会報へ寄稿した際の一部を引用させていただく。

『今日の主役は何と云っても岡田支部長だ。誠にお元気だ。古希を迎えられたとは思えない足取り。最近はこちらこち痛みがでるとか。でも、まだまだ喜寿も傘寿も米寿もある。お祝いの山行には事欠かない。さらなる精進を祈念している一人である。(中略)刈り払われた三角点の周囲に車座になり、佐藤昭義会員持参の大きな西瓜が支部長に献上されたほか、御神酒までも披露された。岡田支部長の益々のご健康を祈念し、万歳を三唱、盛大な「古希の祝宴」が行われた。』

あれから十二年余、喜寿、傘寿のお祝いも出来ないまま、亡くなられたことは残念である。支部山行で毎回配られるバナナはもう、口に入らない。

また、平成九年十二月七日の「扇山(山梨県大月市)」がある。山頂で楽しいひとときを過ごした後、JR四方津駅まで青梅街道をぶらぶら歩く事にしたが、途中の犬目橋からバスに乗った。車中は中年の女性一名だけ。岡田さんは本確的な秋田訛りで話しかけたが、結構通じるものだ。その女性はニコニコ笑いながら会話を楽しんでた。岡田さんの面目躍如といったところか。

ほのぼのとしたひとときだった。  
最後になったのは、平成十三年の本会年次晩餐会後の記念山行で、JR青梅線・御嶽駅からの「日の出山」だった。本会役員が作ってくれたトン汁の

## 第三代秋田支部長

## 岡田さんを偲ぶ

保坂隆司

味と集合写真が最後の思い出となった。何故か今も、岡田さんの柔らかな笑顔と手にもつバナナが目につく。心から冥福をお祈りしたい。

合掌

岡田さんのお付き合いは本当に古く、最初に知り合ったのがいつだったか、どうしても思い出せない。アキタ・アルパイン・クラブ(AAC)には、昭和二十八年の入会だから、翌年々初の総会でお会いしたかも知れないが、記憶にない。しかし、今でもはっきりと覚えているのは「AAC太平山集中登山」の時である。岡田さんをサブリーダーに児玉、館岡、堀江、栗山の各会員と私の六名が、岩見三内コースを登り、翌日昼前に他四コースから登った会員たちと太平山山頂で無事合流した山行であった。そのとき丸舞川の清流に架かる小さな橋を上高地になぞって「岩見のカツパ橋」と命名したのが岡田さんであった。その夜のキャンプファイヤーと山の歌の合唱は、太平の山波と丸舞のせせらぎに溶け込み、尽きることのない楽しい思い出となったのである。

その後、岡田さんは昭和三十二年六月に鳥海山の蟻の戸渡りバトトレスに挑戦され、新田慶一会員他と鳥越川から登り詰めて初登攀に成功している。そして同三十三年、三十四年にはAACの委員となり、翌三十五年・三十

六年には副会長に選任されて、その発展に尽力されたのであった。  
一方、秋田県山岳連盟の理事には昭和三十四年の総会で選任され、以降三十八年まで務められて活躍いただいたのであるが、特に三十六年十月に十和田・八幡平国立公園で行われた第十六回秋田国体登山では準備・実行委員として、また同事務局の総務企画部長としてスポーツ登山の実践と秋田国体登山の成功に多大なる貢献を果たされたのである。

これに先立って設立された我が日本山岳会秋田支部は、この秋田国体登山の準備・実行委員会の一翼を担い活動してきたのであるが、国体終了後は、支部事務局が秋田市を離れたこともあって、充分な活動がなされずに時を過ぎたのであった。

しかし岡田さんは、昭和四十年再度AACの委員となり、九月には荒巻廣政初代支部長と佐藤兼治第四代支部長の紹介で日本山岳会へ入会された。

低迷を続けていた秋田支部の再興を願う支部員は昭和五十七年八月に支部総会を開き、第三代支部長に岡田さんを選出し、活動方針を掲げて再出発し

た。その後の活躍ぶりは皆さまご承知の通りであるが、平成十一年四月まで十六年八カ月の長きに渡り、支部運営の要として献身されたのである。

この間、これらの功績が認められ、同十三、十四年、本会の評議員に選任され、その大任を果たされたのである。岡田さんは大正十五年の生まれであるが、山仲間にあざれ惜しまれて去る平成二十一年四月九日に永眠された。行年八十四才の長寿であった。ここに謹んで心からご冥福をお祈り申し上げる次第である。 合掌



平成5年・年次晩餐会会場にて

社団法人日本山岳協会

創立五十周年記念式典開催

日本山岳協会は創立五十周年を迎え、平成二十三年一月十五日、東京プリンスホテルで記念式典を開催、表彰を行った。(秋田県関係者は十一名)

受賞された当支部関係者は次の通り  
高橋守 今野昌雄 荘司昭夫  
加賀谷昭一 佐藤和志

おいだら(太平)山・中岳の二等三角点に標柱を設置

堀井 弘

今年(平成二十二年)の秋田県内の登山シーズン中の天候は、日曜日毎に雨が降り、山行も思うように出来ない日が続いたが、紅葉の始まりと好天を狙い、久々の会山行を十月二十四日、ホームグラウンド・秋田市の太平山でおこなう。第一グループは中岳、第二グループは前岳(女人堂)まで。グループ、コースは自由とし、十一時三十分まで前岳女人堂に集合することとした。何といたってもメインは中岳頂上(木曾吉神社)脇にある二等三角点の標石地点確認である。そのため作製した二等三角点の位置と書いた標柱の設置、その周囲のヤブ払いと清掃活動は第一グループの担当。

私達も数多くの山登りをし、三角点に触れ、山頂に立った気分を味わっているが、今般、三角点について少し関心を持ち、山行前に文献に目を通す。三角点とは、地形図を作製する時に設けられた測量の基準点を正しい位置で示すもので山頂ではない。現在のよう

な高度技術がなかった時代に、地形図は三角測量によって多くの三角点網を作り、作製したものである。三角点は、地図上では△印で示され、全国で五〇四ヶ所に設置されており、中岳もその一つです。三角点に埋設されている標石には、上面に十印が刻まれていて、等級により大きさと埋設方法が異なり、一等三

角点は十八センチ角、長さ八十二センチの石柱で、石柱の下にさらに二段の盤石が埋められ、重さは九十キロ。二等と三等の三角点は十五センチ角、長さ七十九センチ、盤石は一段となっているとのこと。当日は好天に恵まれ、絶好の登山日和で、私達第一グループは支部長はじめ六名で中岳に設置する標柱と作業用具を背負い、八時に二手ノ又登山口を出発する。このコースは登り慣れているものの、スタート時の尾根道のブナの根が露出している急坂は少し辛い。重い荷を背負っている鎌田会員、安藤(金)会員達は若さがあり、パワー全開で登ってゆく。こちらは黄色に咲いているミヤマアキノキリンソウを楽しみながらいつものように「ゆつくり、フアイト」を合言葉にし、急坂を経て山腹を巻き、女人堂に九時十五分到着。小休止。金山滝コースからの石川会員も合流。好天で無風、眼下に秋田市内を望む。ここから尾根筋を通り、前岳山頂経由で、色づいているブナ林を通過、三角井戸で水分を補給する。

ここからパワー全開で急登を登り、第一グループは十時十五分、二等三角点があり、木曾吉神社の建つ中岳山頂着。ザブーン・前岳登山口から柴田会員も到着。十一名全員役割分担し、作業を開始する。三角点は神社手前左側の生い茂

った草木の中にあり、残念ながら標石の上部が欠けている。周囲の藪払いや清掃作業をし、背負ってきた標柱を登山者がわかるように三角点近くに設置した。

この二等三角点は長い間位置がわからず、太平山警備委員会の島山秀雄氏がよくやく確認をしたもので、三角点フアンには朗報であった。



中岳山頂・標柱を囲んで

作業を終え、十一時下山開始。第二グループと女人堂前で合流し、昼食となった。各自持ち込み昼食メニュー、進藤名誉顧問からいつものホタテの燻製の差し入れ等があり、秋晴れの下、和気藹々と山談義に花が咲く、というよりも山談義が紅葉していた。

今回のような山行を兼ねて歩道の清掃や標識を付ける事はとても良い事だと思ふ。これからまた計画をして会員で作業をしたいと思った山行であった。



前岳(女人堂)にて

参加者 進藤 佐々木(民) 鈴木(要)  
今野(昌) 小笠原 大山(健) 鈴木(裕)  
鎌田 堀井 高橋(忠) 石川 柴田  
伊藤(秀) 安藤(金) 会員外 島山秀雄

韓国山岳会慶南支部来秋予定

本年設立二十五周年を迎える韓国山岳会慶南支部は、その記念事業の一つとして来秋し、交流登山をしたいとの連絡があり、希望として「二千メートル級の山で日本百名山」とのことで、岩手山を紹介しました。

期日は十月の初め、大韓航空の就航日に合わせ、十月六日(火)から十日(月)の予定となっております。会員皆さまのご協力をよろしくお願い致します。

ネパールの山旅を楽しむ

佐々木 民 秀

平成二十二年、日本山岳会がエベレストに登頂してから四十周年を迎えた。その四十周年記念として、海外委員会が主管して記念トレッキングを立案し、支部活動活性化プロジェクトチームも協力して「ヒマラヤトレッキング」を企画した。その企画の一つに、ヒマラヤ越えフライトと八千米峰展望があり、かつて入城したこともあるカリガンダキ流域とあつて、急速参加させて頂くこととなり、当支部から、マナスル登頂五十周年記念トレッキングに参加した鈴木事務局長と、その時事情があつて参加できなかった高橋監事の三名で申し込みをした。

しかし、参加者が少ないとのこと北海道支部組に編入させていただき、一行十一名(日本山岳会会員僅か四名)をもつてようやく実施する運びとなつた。その他のコースは参加者が纏まらず、全て中止とのこと、盛り上がり低下した現状に改めて淋しさを感じた次第でもあつた。

十一月十五日、秋田空港を出発し、中部国際空港で北海道組と合流。上海(成都)ラサクカトマンズポカラ、ジョムソンと秋田から七回乗り継いで、カリガンダキ河上流にあるジョムソン空港に三十三年ぶりに降り立った。

エベレスト等を眺望してのヒマラヤ越えも楽しいが、何と言つても成都空港から延々と続く山々の眺望は、実に壮観であり、眼下に広がる領域以外も

含める未踏峰の山々は、今後百年達つても登りきれないと云われているが、それを実感できるフライトでもあつた様変わりしたジョムソンでスタッフと合流し、専用バスでカリガンダキを下るが、ツクチエ集落に入つて間もなく、車上の荷物が突然落下、ナントその地点は、昔登つたタンプッシュン峰の下山地であつた。その奇遇、奇々怪々に一行ビックリした次第。

レテ・カロパニに宿り、翌十八日にダウラギリを望むティティツオに向かつたが、天候悪く途中で中止。カロパニからポカラまでは、ダウラギリ、ニルギリ、アンナプルナの山群を眺望しながら悪路を下る。

二十日、ポカラからベシサルを経て、棚田の続く斜面と崖地の悪路を山上のバグルンパニの丘へ。この地に至る途中の大斜面に作られた棚田群の景観は、見所のひとつでもある。バグルンパニの丘には、日本人の援助で建てた小学校があり、マナスル、アンナプルナ山群の絶好の展望地で、夕日の映える山群と御来光を堪能する。

二十一日、ここからバスでカトマンズへ。翌、二十二日に八千米峰五座を眺望するマウンテンフライトを楽しみ、午後からダルバル広場(王朝広場)、スワヤンブナート(目玉寺)等を観光する。

二十三日、往路を乗り継ぎ名古屋で一泊し、帰秋した。

尚、行動中に見たトレッカーはヨーロッパ系が圧倒的に多く、それらも皆若い。見かけた日本人は唯一人のみ。又、専用バスを利用できるこれらの地域は、後期高齢者になつても十分楽しめるコースでもあつた。



展望地・バグルンパニの丘にて

年次晩餐会開催

十二月五日午後六時から、東京品川プリンスホテルアネックスタワーで開催。約五百名出席。

当支部出席者 佐々木(民) 北林 福田(光) 鈴木(裕) 佐藤(博) 翌日の懇親山行・鎌倉アルプス(神奈川県)には佐々木(民) 鈴木(裕) 佐藤(博) 参加。

支部長会議

晩餐会に先立ち本会会議室で開催。佐々木支部長出席

インターネット研修会

晩餐会に先立ち講習会開催。鈴木事務局長出席